

# ベケット、殺害への意志

堀 田 敏 幸

## 一、理由なき殺害

殺人事件は物語作品にとって格好の材料である。というのも、殺人が人間社会において最悪の犯罪であるという以上に、他者を抹殺するという行為が一人の人間の人生を終焉させることで、その死者の魂が生き残った者の心の中に全面的に依託されるためである。殺人者は自分の犯した犯行の意味付けを行うと同時に、殺された相手の怨念までも自分の領分として抱え込まなければならない。彼は生存している自分と、死者の二人分の人生を生きていくことになる。彼は警察から追われる状況と、なぜこのような犯行を犯してしまったのかという焦慮の二重の拘束の中で、自身の行動を律しなければならない。彼は逃走のさ中であって、自分の犯行理由の正当性を自分に納得させる必要がある。その理由付けは、決して一回限りの納得では終わらないであろう。なぜなら、どんなに犯行が自分の側に正しいと意義づけるとしても、殺人という行為は正当防衛の場合を除いて、二度と償うことのできない犯罪であるからである。殺人者が自分の行為の不可避性に何度も立ち返り、思案することになる物語の中核がここに成立する。現実に行おうとして躊躇することになる殺人行為は、物語の中で実行されることによって、想像力の確固たる布石となるであろう。

ベケットの小説でも殺人行為は起こる。小説『モロイ』（一九五一年）は主人公であるモロイが放浪の末に自分の名前も忘れてしまったあげく、一人暮らしで数も数えられなくなった母親に会いに帰る場面から始まる。彼はその母親の部屋で、自分の過去の体験を物語ろうとする。彼の足は不自由になって、松葉杖を使わないと歩けない程に悪化している。彼は放浪の生活において食物はごく少量しか取らず、睡眠も徹夜は平気で、気休めに小石をしゃぶったりす

る。自転車に乗っていた時には、犬をひき殺したこともあった。そして、森の中の小屋にいたとき炭焼きだと名の男が入ってきて、一緒に小屋に泊まってくれという話のはずみで、不審に思ったモロイはこの男の頭に松葉杖で一撃を加え、踵<sup>かかと</sup>で脇腹を蹴って殺害してしまう。この殺人事件はモロイが回想の中で語っていることであり、しかも森の中の他に誰も目撃者のいない見ず知らずの男の殺害なので、これ以上の物語的展開は起こらない。普通、殺人を小説作品で語るときには、殺人者と犠牲者の間には深い因縁が生じるはずである。ところがベケットの場合、殺人は見知らぬ者同士において出会いがしらに、しかも山中の人気のない状況で、動物的な保身本能のもとに発生するために、モロイはこれを不可抗力と見なして、彼の人生を強く拘束するものではないと考える。彼はこの殺害を、一時的な偶発事件として捉えるのである。

小説『モロイ』にはもう一人の主要な人物が登場する。それはジャック・モランという名前の探偵で、彼は放浪中のモロイを探し出し身辺を捜査するよう司令を受ける。彼はなぜか、この捜査に自分の息子を連れて旅に出る。そして、途中で息子が自転車を買いに行っている間に、身を寄せていた森の隠れ家にモランと顔のよく似た男が入ってきた。モランはこの男が誰か尋ねると、その男が自分の方へ手を突き出したように感じたので、彼に反撃を加えた。ところが、モランは彼をどのようにして殴りつけたのか、よく覚えていないと言う。少し後で彼は、見知らぬ男が頭から血を流して倒れているのを見つけたのだった。この事件も、先にモロイが森の小屋で炭焼き男を松葉杖で殺害した状況とよく似ている。他に誰もいない隠れ家に一人の見知らぬ男が入ってきたので、我が身の危険を避けるために相手を殺害したという、正当防衛的な事件である。ただ一つモロイの場合と違う点があるとすれば、それは語り手のモランがこの死んだ男の容姿について、彼自身と「顔のよく似た」人物と断っている点であろう。モランは殺害した後の男の容貌について、「彼はもう私には似ていなかった<sup>1)</sup>」というように再度言及して、自分と男の関係を暗示している。

なぜ初めて遭遇した男の容貌について、自分と顔がよく似ている男というように断るのか。勿論、誰であろうと一番に興味を持っているのは自分自身である以上、出会った人物が自分とよく似ているなら、それが強い関心を引くことは確かであろう。しかし、文学作品の中で作者がそれを特別な理由もないのにそう規定するのは、単に容貌の相似だけに留まらず、他の点でも似通っているところがあるからに違いない。この作品の場合、モランはモロイを捜査すべく彼の行方を追っている。ただし何のためにモランがモロイを捜査する必要があるのか、作者は告げようとしな。第一部において母親を捜しているモロイが記憶喪失者という漠然とした存在であるように、モランの探偵としての職責の重要性も作品上からはまるで読者に伝わってこない。モランもモロイと同様に単なる放浪の旅に出ているだけのように感じられるし、息子を

同伴させているのも、まるでボーイスカウトであった彼に教育をほどこす為であるように見える。一体、モランは何のためにモロイを捜そうとするのか。彼自身が、モロイ捜索の確かな目的を知らないと言う。こういう状況の時に、自分に似た男を殺害するという挿話は何を意味するのか。

自分に似た男を殺す。これは見も知らぬ行きずりの男を単に殺したのではない。殺したのは自分に似た男、つまり自分自身を殺害したことを意味するのではないか。勿論、この殺害の時点において、モラン自身は殺した男が自分自身であることに気付きはしない。なぜなら、モランはこの殺した男を森へ引きずっていき、小屋の板切れを彼にかぶせてやると、そこを去ってまた旅立とうとする。彼はモロイ探索に再び出発するのであって、彼が何らかの苦境に陥ることは生じない。しかし、モランは確実に彼の一部分を殺害したのである。モランは自分の性格についてこのように言う。「私のような人間は、その逃走中においても、自分が何から逃れようとしているか忘れることはできない<sup>2)</sup>」。奇妙な性格付けである。というのも、モランは探偵であって、彼はモロイを追跡しようとしている。他人を追いかける職業の人間が何かから逃れようとしているというのは、物語の筋道として逆行していると言えよう。勿論、モランは自分の捜査の過程をこれが終了してから回想しているので、彼が探偵に相応しい気丈夫な男である必要は必ずしもない。だから、モラン探索と切り離して考えれば、彼にも心の内に逃走すべき何かがあって然るべきであろう。

モランは自分によく似た男を殺害した。彼には逃れなければならない何かがある。彼が逃走中の身であるなら、彼の追跡者を自分の身辺から追い払わなければならない。彼は今、探偵として一人の人物を捜査すべく、森の人気のない小屋で夜を過ごそうとしている。そこへ一人の見知らぬ男が入ってきた。その男は一体、何者なのか。彼の手が自分の方へ伸びた瞬間に、モランは危険を感じ取り、彼の頭に一撃を加えた。モランが殺害した男は、顔付きが彼に似たところのある者であった。彼は一体、何を殺したのか。自分の中にある恐怖を抹殺したのである。その恐怖とは彼が逃れなければならない何かである。その何かとは一体、何であるのか。それは何かに対し、逃走しなければならないと思い込んでいる気弱なモラン自身に他ならない。彼は自分の中に巣くう不安な自己を殺害したのである。

だが私には太陽を喜ぶ必要もないし、またそうすることも好きではない。暖かさと光とを渴望するエーゲ海人、私はその者を殺した、彼は私の中で早い時期に自殺したのだ。雨降りの日の青白い薄暗さの方が、より私の趣味に相応しかったのだ、[...]<sup>3)</sup>

これは探偵のモランではなく、母を捜すというモロイの言葉である。自分と顔付きのよく似

た男を殺害したのはモランの方であるが、主人公のモロイも同様に見知らぬ炭焼き男を殺害した。モロイと炭焼き男の二人に共通する特徴は何もないが、森の中の小屋に見ず知らずの男が入ってきて、防衛本能からとっさにその男を殺してしまうという条件は、モランの場合と類似している。モロイにもモランにも男を殺害する理由は我が身の保身ということだけであって、他に何か特別な犯罪理由があるわけではない。しかも、モロイもモランも回想の中でこの事件を語っていて、まるで夢の中でのことのようにその場限りの出来事として、それが二人の人生に深く後悔をもたらすことはない。モロイの炭焼き男の殺害もモランの場合と同様に、彼の内なる自己を死へ追いやったと理解することも十分に可能である。怨恨の伴わない殺人、これはその人物にとっての内なる分身を殺害したことを意味するであろう。母に会いに行くべく放浪するモロイとモロイを捜すべく孤独な放浪に終わるモラン、記憶喪失に陥ったモロイと逃走の恐怖を抱いているモラン、この二人は分身の関係にあると十分に考えられよう。

そうすると、エーゲ海人の話に戻るなら、暖かさと光を渴望するエーゲ海人を殺したとするモロイの言葉は、探偵のモランにも通用するであろう。暖かさと光を愛する人間を嫌う、これはベケットの作品全体に登場する主要人物の性格であるが、今問題にしたいのは、そのエーゲ海人をモロイは「殺した」とまず言い、そしてそのエーゲ海人は「私の中で自殺した」と続けている点である。一体、エーゲ海の陽光に満ち足りた人物はモロイに殺害されたのか、それとも自殺したのか。答えは両方ということになるろう。なぜなら、モロイは彼の中の陽光を好む自己を殺した、そしてその陽光を好む自己は、時を同じくしてモロイの中で自らを抹殺していたのである。他殺か自殺か。自分の中の分身ともいうべき自己を葬り去ろうとするとき、主体となる本人は分身を殺したと判断すべきか、それとも主体によって嫌われている分身は自ら自殺したと理解すべきか。人間の意識の中で起こる現象は、その行為者と被行為者の区別が明確でない場合が多い。この場合も分身を明確な他者と見なすのか、それとも自己の一部と見なすのかによって、他殺か自殺かの分岐点になる。恐らくモロイの場合、その両方の様態を捉えてまず他殺と見なし、続いて自殺と理解したものと判断できるであろう。

顔のよく似た人物を殺したというモランの場合、彼は他人を殺害したのか、それとも自分の分身にも等しい内なる自己を殺したのか。モランはこの出来事を回想の中で語っているが、その回想が夢での事件であるかのように不確実でもある。彼は分身を殺した、それはつまりエーゲ海人の場合のように、内なる自己の自殺というようにも理解可能なのである。人は自分の境遇や欲望によって様々な分身を作りだす。それは時に別の名前を与えられた人物として明確な人物像を描くこともあるが、多くの場合、名前も持たずに欲望、不安、悔恨として主体に付随する。これらのどれかが次第に肥大化して明瞭な姿を取るとき、それは分身として形成される。そしてこの分身を、主体は何とかして消失させようと願う。ところが、その人物の不安の

身代わりである分身を容易に追い払うことは、主体には不可能に近い。主体は分身を抹殺することを無意識のうちに選択する。自分で分身を殺そうとすることは自分の一部を殺すわけであるから、主体はこの殺人に気付かない。彼は分身である自己を殺すことを自殺と認識する。自己の分身を殺害することは、主体にとって自殺の一形態となり得るであろう。

小説『マロウンは死ぬ』（一九五一年）は『モロイ』に続いて執筆された作品であり、内容も両作品は似通ったところがある。マロウンはモロイ以上に足を悪くして這うこともできず、ベッドに横たわったきりで物語を書こうとする。彼はすでに死を意識しており、これまでも昏睡状態で生きてきたようなものだという。彼は無口な少年サボスカットの話などを語ったあと、精神病院に入院している老人マックマンについて話す。そして、ここで患者の世話をしている低脳な男レミュエルが、マックマンや他の患者を遠足でボート乗りに連れて行く。殺人事件はこの時起こる。レミュエルは持っていた斧で、透きを見てモーリスを殺害した。そしてすぐさま、もう一人の男アーネストも殺害した。なぜ、レミュエルは突然二人を殺したのか。その理由をマロウンは語ろうとはしない。他の人間と一緒にレクリエーションに来ているというのに、彼は敢然と殺人を実行した。この事件も、モロイやモランが森の小屋で見知らぬ侵入者を殺害したことと類似しているであろう。レミュエルの場合、被害者の二人は顔見知りであったこと、そして前もって殺害の凶器である斧を用意していたことがモロイやモランの場合と違うが、それでも理由もなく、突如犯行に及ぶという点は同じである。なぜ、このような残酷な死が起こるのか。マロウンが物語として自由に書いているためとはいえ、そう書かざるを得ないところが問題である。

マロウンは自分の語る言葉について、このように考える。「失敗して、慰められて、休息して、その後、私はまた始めた、生き、生きさせ、自分において、他人において、他人になろうとすることを。これはすべて何と嘘っぱちなんだ<sup>4)</sup>」。物語を書こうとする人間は、その作中人物について配役を決めなければならない。一人称で書くにしても、自分以外の登場人物が必要となる。この自分以外の人物を自身の性格の一部分として割り当てるのか、それとも誰か現実のモデルがいて、その人物を借用するのか。いずれにしろ、作者は主人公となる人物も含めて、物語の中で他人の生命を生きなければならない。作者は、つまりマロウンは、他人を物語の中で自分の分身として行動させることになるだろう。たとえマロウン自身と別の作中人物の間には何らかの違和感が生じ、作者がそれを「嘘」だと断じる場合が起こるとしても、作者は作中人物と自身との絆を断ち切りはしないだろう。そうすると、理由もなく他人を二人も斧で殺害に及ぶレミュエルというのは、何を意味しているのだろうか。マロウンはなぜ彼の物語の結末を、必然性のない殺人で締めくくるのだろうか。

物語作者は自分の分身とも言うべき作中人物を創り出す。しかし、その人物が作者自身の真

実を反映させていないと、気付く時がある。彼はその人物をどのように処理したらよいであろうか。彼の書く物語から病気なり事故なりによって、その人物を排除してしまえばよいとは思いつくが、それをまたどううまく構想するかが問われる。モロイやモランなら、旅の途中で森の中の小屋に侵入してきた人物を、正当防衛を装って殺害してしまうだろう。しかも、その被害者が彼に似た人物だと付言することによって、殺害の深い理由を隠蔽してしまうことも可能である。人間は自分の中に、出来れば捨ててしまいたい分身のような存在を抱えている。物語の作者にとってこの秘められた憎むべき人物を、姿が似ているというレッテルを貼ることで殺害にもっていくことは、十分な理由付けとなろう。エーゲ海人の太陽好きが性格に合わないとなれば、モロイならこの人物の殺害を自殺と言い換えることも辞さないであろう。作者は自作の登場人物に対して全権を保持している。ベケットの作品における理由なき殺害、これは彼の人生において恐怖の象徴となった分身を、密かに消去させようとする作者の意図であろう。ベケットは初期に執筆されながら、発表が一九七〇年になってしまった小説『メルシエとカミエ』の中で、分身の誕生をこう嘆いた。

この瞬間ごとに、人が生まれるような日もあるもんだ、とメルシエが言った。そうになったら、どこも下らない小メルシエであふれかえる。ぎよっとするよ、これじゃ、いつまでたっても、くたばれない。<sup>5)</sup>

## 二、自殺の失敗

モロイもモランも見知らぬ人間を容易に殺害することができた。しかし、犠牲になった人物はもしかしたら、小屋の中に潜んでいるこの二人を反対に殺すことも有り得たかもしれない。なぜなら、この二人こそ山小屋に無断で入り込んでいる侵入者であって、他人の権利を不法に侵しているからである。一体、どちらが殺人に関して正当と言えるであろうか。この場合、物語は主人公であるモロイやモランの立場から描かれているので、二人の状況や心理が優先的に動機として認められている。つまり、相手が自分たちの方へ攻撃の手を出そうとしたので、防衛的に殺害にいたってしまったのだと。これは二人の状況として止むを得ないことであろう。一方、二人の心理面から捉えると、見知らぬ男は顔付きが似ている男であった。その似ている男を殺すとモランが回想の中で語ることは、彼の殺した男が彼の分身であり、彼自身に他ならないことを暗示している。彼は自分自身の一部を殺害したのであり、自殺への第一歩であったのである。

自殺は他殺よりも恐らく困難が伴うであろう。なぜなら、殺す相手が自分となれば、自分へ

の憎悪と同時に愛着がある以上、これを実行するには相当の勇気と覚悟が必要となる。ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』（一九五二年）に登場するエストラゴンとウラジミールの二人は、いわば自殺幻想に取りつかれている人物である。特にエストラゴンは、かつてデュランス川で投身自殺を図ったと言う。なぜ彼がそのようなことをしたのか、その理由は本人によって語られてはいない。この自殺話の直前で、エストラゴンが自分自身を一生キリストになぞらえてきたと話していることから、彼がキリストにならって殉教とまではいかないとしても、生きる価値をこの現世よりも死の世界に見出したというように理解もできる。いずれにしろ、彼は過去において自ら命を放棄することを決意したのであり、そして現在も「首をつってみようか？<sup>6)</sup>」と自殺への意志を先に持ちかけるのは、二人のうちエストラゴンの方である。ところが、彼は自殺への誘惑に誘われもするが、すぐにその困難さにも考えが及ぶ。エストラゴンは、「ゴゴー、軽い… 枝は折れない… ゴゴー、死ぬ。ディディ、重い… 枝は折れる… ディディ、ひとりぼっち<sup>7)</sup>」と言う。ここでゴゴーというのはエストラゴンの方であって、自分の方が死ぬと言っているわけだが、結果的には相棒のディディ、つまりウラジミールのことを考えて、自分一人だけが死ぬのは躊躇されると結論づける。

自殺は難しい。そこで考えつくことは他殺への願いだ。自分が死のうと思っているとき、自分で自分の命を絶つのはそれなりの苦勞がある。それにエストラゴンが川への投身自殺で未遂に終わったように、そして木の枝で縊死<sup>いし</sup>をはかった場合、枝が折れて失敗するのではないかと憶測したように、自殺には失敗への危険が付きまとう。これを避けるためにも他人によって確実に死へと導いてもらう方が、死を願う者にとっては安心であろう。ただし、殺した側の者には法律上、殺人罪に問われるところが別の問題として発生することになるが。それはともかくとして、エストラゴンとウラジミールは絶えず死への誘惑に駆り立てられる。その手段は自殺が困難となれば、残るは他人によって死へと導いてもらう以外に方法はない。

エストラゴン： 為を思ったら、俺を殺さなけりゃいけないだろう、他の奴と同じようにな。

ウラジミール： 他の奴って、どの？ どの奴だって？

エストラゴン： 何十億という他の奴らさ。<sup>8)</sup>

かつて自殺に失敗したエストラゴンは、他人によって死の世界へ送り届けて欲しいと願う。それは彼一人の望みではなく、何十億人という人間が希望したことであると言う。この多数の人間とは、ベケットの生きた時代が第一次、第二次世界大戦で大量殺人の行われたことと関連しているであろう。アイルランド人の彼自身も異邦のフランスにあって、ヒットラーのナチ政

権から逃れるべく南仏へと避難した。こうした戦争の犠牲者は勿論、自ら死を望んだわけではないが、エストラゴンの言葉には皮肉が込められていると言えよう。他人による殺害を必要とする者は、『ゴドーを待ちながら』の中では他にもいる。それは動物のような扱いを受けているラッキーで、主人のポゾーは、「こんな生き物を追い出すなんてことは不可能だ。為を思ったら、殺すしか仕方がない<sup>9)</sup>」と話す。ポゾーはラッキーを奴隷市場で売り払いたいと考えている。しかし、それよりも殺してやった方がラッキーの為になると彼は主張するわけだが、ラッキー自身にしたら自殺は勿論のこと、他人による殺害も望んではいないであろう。ポゾーはラッキーのことを、昔は優しくだったが、「今では自分を殺そうとしている<sup>10)</sup>」と話して、ラッキーの凶悪さに不安を抱く。ポゾーが必ずしも自分が殺される前に、ラッキーを殺した方がいいと考える訳でもなからうが、ラッキーの悲惨さや凶暴性をなくすには、やはり死が望ましいと思うのであろう。

自殺には確実に実行できるかどうか不安が付きまとう。他殺でもその保証はないが、犠牲者が前もって他殺の確実性を考えることは稀であろう。少し視点が変わるが、死の確実性についての話がある。それは悪事を犯した者が死刑にされることになり、その死刑が確実に実行されるかどうかという問題で、ウラジミールがこの戯曲の最初の方で話題に持ち出している。彼は言う、「二人の泥棒がいて、救世主と一緒に磔<sup>はりつけ</sup>になったんだ。[…]ところが、一人は救われて、もう一人は地獄落ちだ<sup>11)</sup>」。なぜ一人は死刑を免れることになったのか、彼はその理由を述べることはできなくて、彼の興味は更に進んで、二人のうち一人だけが救われた話を、その死刑の場に居合わせた四人の福音者のうち一人しか書き留めていないという点に移っている。泥棒の一人が救われた話と、福音者の一人しかこれを伝えていない話のどちらを、ウラジミールは強く訴えたいのか明瞭でないが、ここでのテーマとしては、一人の泥棒は救われ、もう一人は地獄に落ちたことが問題となる。

どうして死刑の現場に臨みながら、一人だけが命を救われることになったのか。同時に刑場にいたキリストは一旦は死したが、三日後に復活した。今、死刑が目前に迫っている。この場合、自殺しようと思っただけの人間にとってよりも、死の到来は確実である。しかも、もう一人の泥棒は実際、死へといざなわれた訳であるから、命拾いした泥棒にしたら、キリストの復活と同様の奇跡が起こったとしか思えないであろう。確実に実行されるはずの死刑が失敗に終わり、死は訪れなかった。これは自殺を考えようとしているウラジミールにとっては、見過ごせない重大事であるだろう。公衆の前で実行される死刑が失敗に終わるようなことがあるとすれば、個人が密に行う自殺の確実性はそれよりもはるかに小さくなる。一体、自殺は可能だと信じて敢行してよいものであろうか。ウラジミールにとって疑惑は深まるばかりである。そして、福音者四人のうち一人しかこれを書き留めていない問題に目を向けるなら、泥棒の死など

すぐ横で死刑になったキリストに比べれば、記述するに値しないと福音者に判断されてしまったのであろうか。そうだとすれば、キリストの神性にはほど遠く、むしろ泥棒の卑小性に近い浮浪者のウラジミールにとって、死というものが有意義であるのか、彼の心の中でこの気掛かりは消失しない。

ベケットの研究者、高橋康也と劇作家の別役実は、雑誌の対談でこう話した。「ただ違うのは芥川は自殺したけれど、ベケットは絶対自殺はしないでしょうね。[…]これは宗教的論理的禁止というよりも、効果がないからということでしょう」と高橋が言うと、別役が「芥川の場合はやっぱり、さっきいった図式で言えば、自然回帰という意味で自殺は救いになり得ますからね。ベケットの場合は自殺は救いにならないですよ<sup>12)</sup>」と受け答えた。ここで「ベケットは自殺しない」と言う場合、作家ベケット自身が自殺しないという意味であって、ベケット作品の登場人物が自殺しないということではない。しかし、ベケット自身が自殺しないことと作中人物が自殺しないこととは、相関関係にあると捉えられよう。なぜなら、作中人物は少なからず作者の習性を取り入れているものであるし、作品中においても登場人物が心中を試みる話はあるが、自殺には至らない。エストラゴンは自殺を図ったことになっているが、一応、失敗に帰したと語っている。しかも、ベケット自身は戦争の逃亡生活で死の危険に遭遇する場面があったろうに、自ら死を選ぶことは彼にとって論外であったろう。そして、ベケットの作中人物たちは、旅の途上で食物も小鳥ほどにしか摂取しない貧困の生活においてさえ自殺は考えないし、不必要なものは無しで済ますよう自分に命じている。歩けないくらいに膝を痛め、借財を負い、「もう人間であることに耐えられないだろう<sup>13)</sup>」と言うモランも、自殺までしようとは考えない。

しかしながら、『ゴドーを待ちながら』の世界は自殺する誘惑に満ちあふれている。エストラゴンとウラジミールは事あるごとに自殺へと駆り立てられる。なぜ、そうまで自殺に幻惑されているのだろうか。ウラジミールが「悔い改めたらどうだろう？」と聞くと、エストラゴンが「生まれたことをか<sup>14)</sup>」と応じる場面がある。誕生してしまったことを元に戻そうとするには、精神的に克服するしかないであろう。人間は誰も自分の意志で生まれてくることは出来ない。旧約聖書に出てくるヨブは神に向かって、「なぜ、私は胎内で死ななかったのか。腹を出てすぐ息絶えなかったのか<sup>15)</sup>」と糾問するが、彼の神への恐れこそ、人間の思慮だと反省する。しかし、ベケットの主人公たちが敬虔に神から救いを求めることには、素直になれない部分がある。ベケットは人が誕生したことの意味を、神に直接問いただすことはしないだろう。

自らの生存の意義を見出せない人間は、何かによって希望を与えられ救われることを希求する。どうして自分自身の努力によって生きる価値を見つけないのか、と問う人もいるだろう。

戦争の殺戮によって生存の悲慘さを見てしまった人間には、生きることの希望を見出すことが不可能なのか。人間の労働は原罪を背負った者の罰であって、生きる糧<sup>かて</sup>ではあり得ないのか。ベケットの主人公たちは、生きることの意義を自らの力で発見する意欲を失っているように見える。彼らは何か絶対的な救世主を夢見るだけで、自らの行動によって人間の無為を改善しようと試みることに考えが及ばない。むしろその道化ぶりからは、ベケットが愛したベラックワのように、怠惰であることを至上の楽しみとしているようにも見受けられる。

ウラジミール： 明日、首をつろう。ゴドーが来ない限り。

エストラゴン： もし来たら？

ウラジミール： 俺たちは救われる。<sup>16)</sup>

「明日、首をつる」、それがこの二人に可能であろうか。今日、出来なかったことはまた明日においても、掛け声倒れに終わることは必然であろう。そして、「もし来たら、救われる」、これもとても真実とは思えない。会話の流れに合わせて、つまりゴドーが来ない場合の反対の内容となる「救われる」という言葉が、単に発せられただけのように響く。二人は真剣になって救われることを期待してはいない。それではゴドーが来ない場合、二人が秘めた心の底に隠し持っている考えは何であるのか。ゴドーが救世主としてやって来るとするならば、その救世主は二人にどのような言葉を投げかけ、どのような救助の手立てを施すことが可能なのか。それは、すでに劇中で言われた言葉の中に見出されるであろう。

### 三、ゴドーの意味

ベケットは『マーフィー』や『ワット』の傑作を書く前に、処女作とも言うべき小説『並には勝る女たちの夢』という一風変わった題名の作品を書いた。変わっているのはその題名だけでなく、内容においてもそれまでの小説の常識をくつがえすような奇想天外なものであった。ベケット自身、この小説の形態について、作品の中で持論を展開することも辞さない。彼はフランスの十九世紀の小説家で、「人間喜劇」の名のもとに社会の中で生きる個性的な人物像を描き出したバルザックに対して、批判の矢を向ける。ベケットはバルザックが作者としての絶対的な支配権を持って、彼の作中人物を思うがまま自由にあやつっていると主張する。ベケットは人物が作者の構想の中に整然と収められていることに、現実とはそぐわない意図が働いていると不満を述べる。こうした整合性の強すぎる方法を排除して、現実の不調和な偶然性を取り入れて書いたのがこの『並には勝る女たちの夢』という作品である。ただベケットの意気込

みとは相反して、いざ彼がこの作品を出版しようとする、出版社は見つからず一九九二年の死後出版となってしまった。

この作品の主人公ベラックワは怠惰を主義とする人物であるが、女性との関係において精神面を重視したために、恋愛がうまく進まない。彼はパリやダブリンなど舞台を変え、物語として一貫性を欠いた奇想天外な行動を取る。そんな中で美人にして知性があり、そしてブランデーを好むアルバという女性と恋をする。彼女は次のような考えの持ち主であった。「彼女は死ぬまで生きつづけるという耐えがたい伝統を呪った。肉体がもつ習慣の重苦しい憂鬱<sup>17)</sup>」。「死ぬまで生きつづけることを呪う」というのは、寿命が来るまで漫然と生きていることに嫌悪を覚えるという意味であろうが、無意味な死を避けようとするれば、自分の意志で生存期間を決定するしかない。そのためには、自分で自分の命を好む時に終焉させることになる。つまり、自殺を図るという方法である。彼女はこの小説において自殺することはないが、日々の生活という人間の生命の維持には強い不満を持っている。ちなみにベラックワはダンテの『神曲』の中で、臨終のとき自分の怠惰を改悛しなかったために、罰として煉獄前域で生前と同じだけの期間、待たなくてはならなかった人物である。彼の怠惰には、生きることは生活の義務を果たすことではないという信念が込められているであろう。

自分の生命の時間を自分で決定する。誰でもそれが可能なら望むところであろうが、生命を絶つとはいっても、それには自分の生命が無くなる寂しさがあるうえに、死の実行に対する危険が伴う。もし自殺を図り失敗した場合には、悲惨な状況に置かれることになる。自殺には死ぬだけの覚悟と勇気がいるのである。ベケットは『並には勝る女たちの夢』の出版を断念したあと、同じベラックワを主人公にした『蹴り損の棘もうけ』（一九三四年）という短編集を何とか出版できることになった。この小説は前作よりも作者の意見を控え、物語展開の分かりやすい作品としたものだった。この中に「愛と忘却」と題した一編があり、ベラックワはルビーと恋仲になる。ところが、ベラックワは彼女と恋愛を楽しむというよりは、二人して心中を図ろうと持ちかける。しかも、この心中の意図というのは、ベラックワの一方的な願いからであった。

彼女の役割というのは、きわめて残念ながら、自分一人で《自殺》を執行することが出来ない、その手助けのかいしやく介錯を彼女にやってもらいたいということであった。どうして彼が自死への決意を固めたのか、我々にはまったく知ることができない。<sup>18)</sup>

ここでの心中の方法はピストルで頭を撃つというもので、一人で執行しても困難を伴うような方法ではないだろう。しかし、ベラックワは「手助けの介錯」が必要だと言う。なぜかとい

うと、このあと物語は二人でピストル自殺を実際に行うことになるのだが、まず女性のルビーが実行して、そのあとベラックワが後を追うというものであった。なぜ、ベラックワは一人で自殺できないのか。方法的には十分可能であるのに、しかもピストルで撃つにしても、お互いに相手を撃ち合うことで死に到るといふのなら立派な介添えであるのに、単にそれぞれが自分を撃つだけでは、自殺仲間がいたというに過ぎない。しかし、この仲間がいるということがベラックワにとって、死を実行する重大な手助けになるのであろう。一人で実行するとなれば、その場に臨んで精神的に弱気になり、中止することも起こりかねない。だから、自殺仲間がいるということは共犯であり、その相手の存在によって十分に死に至らしめてもらったという理由になるのであろう。ただし、小説においての結果は、ルビーが撃ったピストルの玉は彼女に当たることなく、単に大地を撃ち抜いただけだった。

自殺仲間がいるということ、これはお互いを自殺の決意から逃げ出さないようにするという意味では、十分に他殺ということにも成り得よう。ベケットの作中人物は、他人によって殺害してもらうことを望んでいる。その典型が『勝負の終わり』（一九五七年）という戯曲であろう。これはハムという盲目の主人が、クロヴという召使いに窓の外の様子を教えてもらったりしながら、日常生活の世話を受けるという家庭内の話である。なぜかハムの両親に当たるナッグと妻のネルはゴミ溜め用ドラム缶に閉じ込められていて、その肉体が抹消された終末観を漂わせている。クロヴは召使いであるが、小さい時からこの家に来ており、ハムを父親代りだとも言う。そして、二人は肉親のような憎悪を抱いている。

ハム : 俺たちを殺<sup>ろ</sup>つつけりゃいいんだ。俺を殺すと約束するなら、食器棚の開け方を教えるぜ。

クロヴ : あんたを殺つつけるわけにゃいかないね。

ハム : それなら、殺すのはよせ。<sup>19)</sup>

盲目で車椅子でしか身動きできないハムは、「おれを殺せ」とクロヴに言う。なぜ彼は息子にも等しいクロヴに、殺して欲しいと嘆願するのか。体が不自由で、自分で死のうにもそれが出来ないということなのか。ハムは自殺への希望を抱いてはいない。あくまでクロヴによって殺害して欲しいと、言葉のうえでは言う。一方、クロヴの方はハムを殺せたらいいと思いながらも、それが叶わないと諦めている。勿論、クロヴにしたら、安易に殺人罪を犯すことは厳禁であろう。ハムは死にたがっている。それも、他人に殺害してもらうという方法を望んでいる。彼はこの現世において、救われようがないことを観念している。なぜもはや救われる望みがないのか。それはベケットの生きた時代が、戦争による大量殺人を招いた時代であったから

なのか。人間は罪のない者をも殺すという悪を犯した。人はそれを償わなければならない。しかし、償うとはいっても、死んだ人間は生き返らない。経済的に助けることは、なぜかベケットにおいて問題にならない。ベケットの世界では精神的に償う必要がある。こうした時、自殺は償い的手段とはならないであろう。しかも、現世に生きる人間は戦争の罪悪によって救済への道が閉ざされていると、ベケットが語るわけではない。彼はナチ政権に追われ、ユダヤ人の友人を失い、悲惨にあえぐ野戦病院で働いたにもかかわらず、彼の文学テーマとして戦争を描くことをしない。ベケットは戦争という一時期の不幸に対するだけでなく、人間の生存自体における救済の困難さを訴えようとする。

人は救われない。そして、自ら命を絶つことも、この救済への道しるべとなる訳ではない。しかし、人は生きていることに希望を見出せず、死へ逃げようとする。彼は誰かによって、この死の世界へ送り届けてもらうことを願うであろう。ハムはこうも言う。「どうしても俺を殴りたいなら、斧で殴れ。でなければ、魚めづ叉すで、さあ、魚めづ叉すで殴れ<sup>20)</sup>」。「斧で殴れ」とは何と残酷な仕業しわざかと思うが、『マロウンは死ぬ』の最後の場面で精神病院の世話人レミュエルが遠足に出たとき、モーリスとアーネストの二人を斧で殺害したことを思い出すだろう。これはマロウンの回想の中で語られていることなので、事実かどうか判明しないが、かえって想像の中で語られる言葉には、その語り手のどうにもならない苦渋が秘められているゆえに、残酷な映像として描き出されるのであろう。

斧で殺す、ベケットには自殺できない反動として、他者による殺害への強い執着心がある。『ゴドーを待ちながら』のエストラゴンが過去に川への投身自殺が未遂に終わったために、自殺への意志を何度も復活させながら、「為を思ったら、俺を殺さなけりゃいけない」と言う。一体、彼を殺してくれる人物は彼の相棒のウラジミールなのか、それとも別の誰かなのか。「明日、ゴドーが来たら、俺たちは救われる」と二人は話し合う。ゴドーは果たして明日やって来るのだろうか。もしやって来たとして、彼はどのようにしてエストラゴンとウラジミールに、救済の手を差し伸べる事が出来るのだろうか。単なる勇気づけの言葉だけで、現世の救いを信じていない二人を説得できるのだろうか。もしゴドーがやって来るなら、この人物は恐らく二人の救世主として出現することになるだろう。なぜなら、二人を救えないような人物であれば、救世主ではないしゴドーでもないからだ。ポゾーと召使いのラッキーが現れたとき、エストラゴンはポゾーのことを最初ゴドーじゃないかと人違いをしたが、ポゾーは勿論、二人を救えない以上、ゴドーに成り代わることはあり得なかった。

ゴドーとは一体、誰なのか。ベケットの研究者、マーティン・エスリンは評論『不条理の演劇』の中で、ゴドーについて書いている。

この戯曲には、浮浪者たちの苦境に対して、もっと良い解決策が確かにあるだろう。それは二人共が、ゴドーを待つよりは好ましいと考えていること——つまり、自殺である。[...] 自殺こそ彼らの気に入った解決策であるが、彼ら自身の無能力と、それを成し遂げる実際的な道具がなくて達成できないでいる。ウラジミールとエストラゴンがゴドーを待つ、あるいは待つ振りをする事で正当化しようとするものとは、まさに彼らが自殺しようとして失敗と帰したその失望感なのである。<sup>21)</sup>

エスリンが説明するように、ウラジミールとエストラゴンの二人は自殺に魅せられ試みようとするが、そのたびに躊躇の壁に追い返されるし、実際に失敗したこともある。彼らは死の世界に逃避することができない。その挫折は彼らを救済してくれるはずの絶対的な救世主の出現を待つことへと向けられる。しかし、その人物は昨日も今日も現れない。彼の出来しゆつらいのなさは二人組の自殺の失敗に符合する。ここで、だからゴドーは二人組の「失望感」の象徴なのだ、エスリンの言うように理解するとしたら、それは単に待ち人が来ない状況を表わしているに過ぎないであろう。ゴドーとは一体、どういう人物なのか、それを指摘したことにはならないであろう。ゴドーとは一体、何者なのか。

ウラジミール： ゴドーさんは君に優しいかい？  
 男の子      ： ええ。  
 ウラジミール： 君をぶたないかい？  
 男の子      ： ええ、僕は。  
 ウラジミール： じゃ、誰をぶつんだね？  
 男の子      ： 僕の兄さんです。<sup>22)</sup>

使いの男の子をゴドーは殴らないが、その兄は殴ると言う。なぜ兄の方だけを殴るのか、ウラジミールは更に尋ねるが、少年は「分からない」と答える。少年がその理由の分からないのは、ゴドーという人物が二人の少年に対して絶対的な権力を有しているからであろう。兄の少年が殴られることから、ゴドーがこの兄に対して権力を持っていることは明らかである。一方、使いの少年には優しいというが、彼が兄の殴られるのを黙って見ているのは、この弟の少年に対しても、ゴドーが兄の少年に対するのと同様の権力を振るっているからではないのか。この弟の少年はゴドーなる権力者に恐怖感を抱いているがゆえに、ゴドーに対して従順になっているだけだとも理解できる。ゴドーとは二人の少年に対する態度から判断すると、一種の暴君だとも推測できるのである。

第二幕でウラジミールとエストラゴンは、昨日出会ったポゾーとラッキーの真似をして遊ぶことを思いつく。ウラジミールがラッキーの役で、エストラゴンがポゾーの役をすることになり、エストラゴンがどう振る舞ったらいいか分からないと言うと、ウラジミールは「俺を怒鳴りつけるんだ<sup>23)</sup>」と指示する。そこで、ポゾー役のエストラゴンは「ばか野郎」とか「ならず者」とか、最後には「豚！」という言い方で、罵倒の言葉をウラジミールに投げつける。この人真似は何を意味するのか。ウラジミールとエストラゴンは、主人のポゾーと召使いのラッキーの関係が単なる仕事上の雇用関係だけに留まらず、支配者と被支配者の関係に置かれていると理解していることになる。二人はポゾーが暴君であって、ラッキーが奴隷の身分であると認識している。

この人真似遊びの途中で、エストラゴンは「考えろ、豚！」とか「踊れ、豚！」というウラジミールの指示をうまく反復することが出来なくなって、その場から立ち去る。そして、しばらくして急いで戻ってくると、エストラゴンは坂の上に誰か人がやって来るのを見たと言う。その言葉を聞いたウラジミールが、やって来た人物はゴドーで「迎えに行こう」と言うが、エストラゴンの方は「俺は呪われてるんだ！<sup>24)</sup>」とばかりに、不安の声をあげる。なぜエストラゴンは坂の向こうから人が来るのを見て、恐怖におびえるのか。彼もウラジミールと同様に、その人物がゴドーであると直感したのだろうか。もしそうだとすれば、エストラゴンがポゾーとラッキーの暴力的な支配関係を演じようとして、彼がうまく罵<sup>ののし</sup>りの言葉を発せられなかったことと関連しているのではないか。「考えろ、豚！」とか「踊れ、豚！」という罵倒は、ポゾーがラッキーに向かって投げつける言葉である以上に、もしかしたらエストラゴンがゴドーなる人物から突きつけられる言葉であると、彼は悟ったのではないか。自分自身に向けられる非難の言葉であるがゆえに、エストラゴンはウラジミールから指示された言葉を口にすることができない。だから、彼はその場から急遽<sup>きゅうきょ</sup>立ち去らねばならなかったのだし、坂の上に現れた人物を見ただけで、「呪われている」と判断を下さざるを得なかったのである。

「明日、首をつろう、ゴドーが来ない限り。もし来たら、俺たちは救われる」。この劇の最後に言われる言葉の状況は、すでに前もって起こっていた。ポゾーとラッキーの人真似をしたエストラゴンがその怒声の激しさに恐怖を覚えて立ち去り、坂の上の一人の人物を見て、それがゴドーではないかと思った瞬間に、ゴドーは二人にとって出現していたのである。ウラジミールはこれを聞き、自分たちは助かったと思い迎えに行こうとする。ところが、エストラゴンの方は反対に「呪われている」、「地獄行きだ」と恐怖の言葉を発した。現実<sup>じつじ</sup>にゴドーが出現し、どういう救済の言葉を二人に掛けるかが問題なのではない。ゴドーなる人物に対して、不安を抱えた二人の者がどのような救いを切望しているかが重要なのである。二人にとって、実際にゴドーが現<sup>うつつ</sup>し身の姿で出現する必要はない。二人が見間違えることとなったポゾーがゴドーで

あってもよいし、坂の上に見えた一人の人物がゴドーであっても構わない。すでにエストラゴンとウラジミールにとっては、彼らの思念の中にゴドーなる人物像は出来上がっている。

ウラジミールは彼の救済者としてのゴドー、泥棒が死刑になるその場においても、二人のうち一人は救われる可能性があるという恩寵にも等しいゴドーを待ち受ける。しかしエストラゴンにとっては、すでに自殺未遂を経験したエストラゴンにとっては、彼を無条件に救ってくれるゴドーでは有り得ない。彼はすでに舞台の上で確言したではないか、「為を思ったら、俺を殺さなけりゃいけない」。そう、エストラゴンはこの現世で救われることを期待してはいない。彼は死の世界にこそ、救済の道があると覚悟している。彼は失敗した経験があるにもかかわらず、自殺への誘惑に駆り立てられるであろう。しかし、そう簡単に自死が叶うわけではない。死を意識すればするほど、死への扉は遠のく。なぜ生まれる前に死んでしまわなかったのかと、後悔の念は募るのであろう。そこで思いつくことは、他人によって我が身を殺害してもらうことである。それに相応しい殺し屋とは誰であるのか。それはまだ見たこともない救済者としての人物であるだろう。エストラゴンを死へと導く介添え人としての人物、それがゴドーである。

## 注

- 1) サミュエル・ベケット、『モロイ』、Samuel Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 235
- 2) 前掲書、p. 189
- 3) 前掲書、p. 43
- 4) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 34
- 5) 『メルシエとカミエ』、Beckett, *Mercier et Camier*, Les Éditions de Minuit, 1970, p. 50
- 6) 『ゴドーを待ちながら』、Beckett, *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit, 1952, p. 21
- 7) 前掲書、p. 22
- 8) 前掲書、p. 87
- 9) 前掲書、p. 43
- 10) 前掲書、p. 47
- 11) 前掲書、p. 14
- 12) 高橋康也、別役実、「ベケットの円環」、『ユリイカ』、一九八二年十一月号、九二頁
- 13) 『モロイ』、*Molloy*, p. 270
- 14) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 13
- 15) 『ヨブの書』、「旧約聖書」、『聖書』、フェデリコ・バルバロ訳、講談社、一九八〇年、八六〇頁
- 16) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 133

- 17) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 166
- 18) 『蹴り損の棘もうけ』、Beckett, *More Pricks than Kicks*, Faber and Faber, 2010, p. 82
- 19) 『勝負の終わり』、Beckett, *Fin de partie*, Les Éditions de Minuit, 1957, p. 53
- 20) 前掲書、p. 99
- 21) マーティン・エスリン、『不条理の演劇』、Martin Esslin, *The Theatre of the Absurd*, Penguin Books, 1961, p. 57
- 22) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 71
- 23) 前掲書、p. 103
- 24) 前掲書、p. 103